

【論文】 奄美群島喜界島におけるシチャミ儀礼の現状と地域差  
 ——アンケート調査の成果報告と考察——

島崎 達也

(慶應義塾大学大学院文学研究科・上高津貝塚ふるさと歴史の広場(考古資料館))

はじめに

シチャミ(シチャミ、節浴)は、喜界島で子供に対して執り行われる水を用いた成長儀礼である。本稿では、2016年9月に実施した全島アンケート調査の結果を基に、現在の子育て世代がシチャミをどのように認識・実践しているのか、そこに地域差が認められるのかを明らかにしていく。

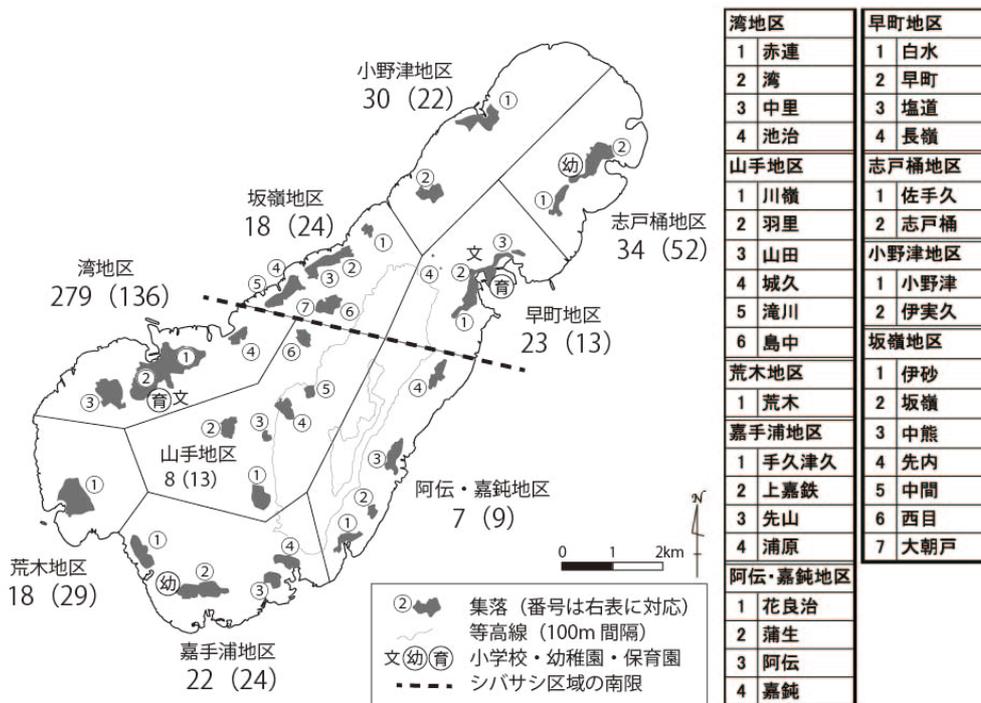


図1: 喜界島の集落分布と便宜上設定した地区の範囲。地区名の下に記載した数字は、その地区に現在住んでいる回答が得られた児童の人数を示す。括弧内の数字はその地区出身の回答者の人数を示す。

1. 喜界島について

奄美群島の北東部に位置する。面積約 57 km<sup>2</sup>の隆起サンゴ礁の島であり、河川はほとんど発達しないが、湧水が各地にみられる。全域が鹿児島県大島郡喜界町をなす。2017年の人口は約 7,200 人で、30 余の集落(シマ)に分散している。各集落は喜界町の大字・小字であり、日常生活や祭事、行政において重要な社会組織である。2012年の統廃合以前は小学校が 9 校存在し、いくつかの集落をまとめた校区が設定されていた。

## 2. 節折目（シチウンミ）と節浴（シチャミ）

節折目は喜界島における節の替わり目であり、旧暦 8 月最初の丁の日を指す。奄美大島の新節（アラシツ）に相当し、正月にたとえた節句日（三井 1965）と認識されている。本研究の対象であるシチャミは、節折目の朝に行なわれる儀礼である。2015・2016 年度に文献調査と聞き取り調査を実施した結果、喜界島の全集落でシチャミがかつて実践されていたことが確認できた。ただし、儀礼の内容は文献や証言者によって細部が異なる。大多数の事例は以下のような流れである。

まず、節折目の朝早くに、母親や祖母が数えで 1～10 歳くらいまでの子供を水場に連れて行くか、自宅に水を汲んでくる。多くは自宅の井戸や集落内外の湧水である。次に、用意したご飯を子供の頭に少量乗せ、持参した細長い植物の葉を水に浸し、子供に水を振りかける。この時、「大きくなーれ」などと唱え、子供の成長や出世を願う。その後、自宅などで米飯を食べる。これらに加えて、雲を観察する、石を拾う、樹木に水をかける、神酒を捧げるなどの手順も多く事例で認められる。シチャミは一部の例外を除いて早朝に各家庭・各集落で執り行われる儀礼であるため、喜界島で生まれ育った高齢者であっても他集落の事例を全く知らない場合が多い。

## 3. 問題の所在

管見の限り、シチャミの最も古い記録は西俣謙龍（1905）の『喜界島誌』にある。伊波普猷（1961）や三井喜禎（年代不明）、竹内譲（1933）らもシチャミを紹介していることから、20 世紀初頭の時点で伝統行事として喜界島で定着していたことが分かる。集落ごとの地域差も指摘されている。喜界島の全集落で同名の儀礼が同じ節折目に行なわれ、その内容に全島に共通する点（同質性）と集落ごとに異なる点（多様性）の双方が確認できる事実からは、同じ起源の古い成長儀礼が集落毎に独自の発展を遂げたという仮説が立てられる。そうであるなら、同質性の認められる内容は、変化することがない儀礼の核となる要素であり、集落ごとの多様性が認められる内容は、儀礼の内容に干渉するそれぞれの集落の様々な環境的・社会的要因を反映して変化した要素であると理解できる。

シチャミの報告例の多くは事例の列挙や意味の解釈に終始し、儀礼そのものについての詳細な分析はなされてこなかった。竹内（1969）は、シチャミを構成する 4 要素（水、石、草、唱えごと）を抽出して意味を考察しているが、集落ごとの差については簡潔な比較のみである。シチャミと生誕儀礼の類似を指摘した小野（1974）は、季節の変り目に水や石、草、穀物の霊力を子供に付ける呪術だと解釈した。しかし、その地域差は分析していない。シチャミの同質性と多様性を正確に求めるためには、調査事項を明確に設定した上で、複数の事例を収集し、集落内および集落間で比較する必要がある。この点で、アンケート調査は効果的な調査方法である。

シチャミが現在も実践されていることは報告されていたが（中澤 2008；喜界町保健福祉課 2011）、詳細な情報は不明であった。様々な要因による民俗儀礼の全国的な均一化（山田 2017）が指摘される今日、成長儀礼であるシチャミも変質していることは想像に難くない。シチャミの内容の変化は戦前から指摘されており（岩倉 1943）、現代社会に合わせて変質していくシチャミを理解することは、シチャミの同質性と多様性に迫る上で必要である。シチャミ実践の現状を悉皆調査によって正確に把握することを目的に、アンケート調査を実施することにした。

#### 4. アンケート調査

2016年の節折日は新暦9月2日（金）であった。見学させて頂いた志戸桶集落のシチャミの様子を考慮して設問を作り、同月23日に島内の小学校2校、幼稚園2園、保育園2園の全児童600名に無記名式のアンケート用紙1枚と提出用封筒1通を配布した。配布対象は各児童であるが、実際に回答するのは保護者であり、シチャミを受ける可能性がある児童とその親世代に関する情報を収集することを目的とした。設問は全15問である。

#### 5. アンケートの結果

74.5%に相当する447名分の有効回答が回収できた<sup>1</sup>。本稿ではシチャミの担い手の属性や児童とその保護者がシチャミを受けた経験に関する設問の結果を紹介し、最後に若干の考察を加える。

##### 問1 アンケートを受け取ったお子様（以下、お子様）がお住まいの集落

本稿では、集落を基本単位に地域差を論じる。児童とその保護者（回答者）が同居しているという前提で、その集落を問うた。結果、回答者の数が極端に少ない集落が多数出てしまった。集落ごとの集計が理想であるが、個人が特定される恐れや集計の煩雑さ、サンプル数の少なさによる誤差を避ける為、隣接するいくつかの集落をまとめた便宜上のグループごとに集計することにした。旧小学校校区を参考にしたが、地形や人口、祖先祭の日にちの地域差（シバサシ区域（e.g.北見 1959））、調査結果を考慮して改変した。このため、伊実久・嘉鈍・川嶺・羽里・山田の5集落<sup>2</sup>が旧校区とは無関係なグループに入っている（図1）。全人口の4割以上が集中する湾地区が279名と最多で、回答の6割以上を占める。

<sup>1</sup> 回収率は2校合計で約67.5%（258/382）、4園合計で約86.7%（189/218）。

<sup>2</sup> 本稿のグループ分けは試験的なものであり再考の余地があるが、この5集落はいずれも得られた回答が非常に少ないため、旧校区の改変に問題があったとしても全体の傾向に大きな影響は無いと判断した。

## 問2 あなた（回答者）とお子様との関係（ ） ※問10参照

ひとりの回答者が複数の児童の回答を提出する場合は、1通の提出用封筒に全員分の回答用紙を入れて頂いた。この結果、440名の保護者が447通のアンケートを提出したと算出した。433名の回答者が児童の親で、祖父母は5名、無回答2名であった。

## 問3 あなた（回答者）の出身集落（ ）

問2で算出した440名の回答者の出身集落を以下に示す。出身集落を2ヶ所書いている回答者が1名おり、これをそれぞれの集落でカウントしたため、回答は441名分となる（図1）。島外出身者は111名で、このうち最多の66名が湾地区に住み、小野津地区（11名）がつづく。

## 問5 あなた（回答者）はシチャミという行事を知っていますか？

A.はい（188名（42.7%）） B.いいえ（252名（57.3%））

無回答もあったが、問15の回答がA,Bであったので「いいえ」にカウントした。

問4で437名の回答者の年齢を10歳刻みで把握した（n=440 無回答3名）ので、年齢ごとのシチャミの認知度をみていく。10代・20代の回答者（n=43）のシチャミの認知度は39.5%、30代（n=238）は37.4%である。40代（n=135）は50.4%で、50代・60代（n=21）は66.7%の回答者がシチャミを知っていた。このうち児童の祖父母5名（50代・60代）は全員がシチャミを知っていた。年代が上がるにつれてシチャミを知っている割合が高くなる。

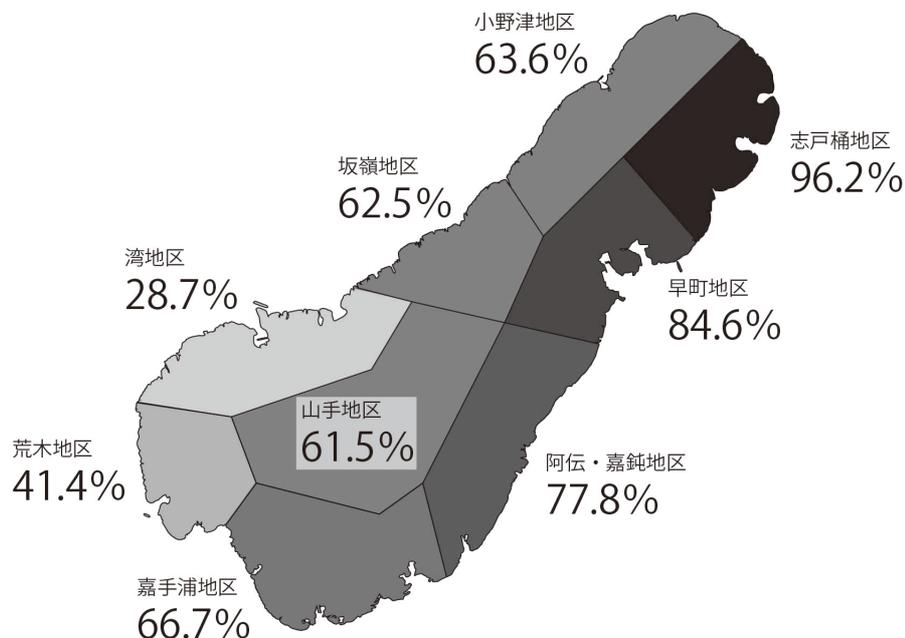


図2：出身地ごとのシチャミを知っている回答者の割合

次に、回答者の出身集落（地区）（問3）ごとにシチャミを知っている回答者の割合をみると、志戸桶地区出身の回答者はシチャミを知っている割合が約96%に達している。早町地区や阿伝・嘉鈍地区はそれぞれ約85%と約78%の出身者がシチャミを知っていた。一方で、小野津、坂嶺、嘉手浦、山手の各地区出身者は6割、荒木地区出身者は4割程度で、湾地区出身者にいたっては3割以下である。東海岸の集落出身の回答者の多くはシチャミを知っているのに対し、西部の集落出身者はシチャミを知らない割合が高いことが明らかとなった（図2）。島外出身者（n=111）のうち、シチャミを知っていたのはわずか5名（約4.5%）であった。

#### 問6 あなた（回答者）は、子供の時にシチャミを受けましたか？

- A. はい1（受けたことを記憶している） B. いいえ（確実に受けていない）  
C. はい2（受けたようだが覚えていない） D. わからない

まず、回答者の出身集落ごとに集計した（表1）。シチャミを受けた経験がある回答者（「AまたはCを選択」）の分布傾向は、出身地ごとのシチャミの認知度（図2）とほぼ一致する（図3）。志戸桶地区出身の回答者の約92%はシチャミを受けたことがあり、湾地区出身の回答者でシチャミを受けたことがあるのは約12%に留まる。

表1：出身地ごとの回答者がシチャミを受けた経験

	はい1	はい2	いいえ	わからない	無回答	合計
小野津地区	8	4	6	4	0	22
志戸桶地区	43	5	1	3	0	52
早町地区	9	0	1	3	0	13
阿伝・嘉鈍地区	4	2	1	2	0	9
湾地区	0	16	53	67	0	136
山手地区	5	2	4	2	0	13
荒木地区	6	5	13	4	1	29
嘉手浦地区	11	0	9	4	0	24
坂嶺地区	5	5	11	3	0	24
集落無回答	1	0	3	4	0	8
島外	0	0	96	5	10	111
合計	92	39	198	101	11	441

次に、自身がシチャミを受けた記憶の差についてみて行く。志戸桶地区出身者（n=52）は、「はい1」が43名（83%）と「はい2」が5名（10%）、早町地区出身者（n=13）は「はい1」が9名（69%）で「はい2」が0名と、シチャミを受けた記憶がはっきりしている回答者が多かった。一方で、荒木地区出身者では「はい1」が6名（21%）と少なく、湾地区出身者（n=136）にいたっては、「はい1」の回答が0であった。

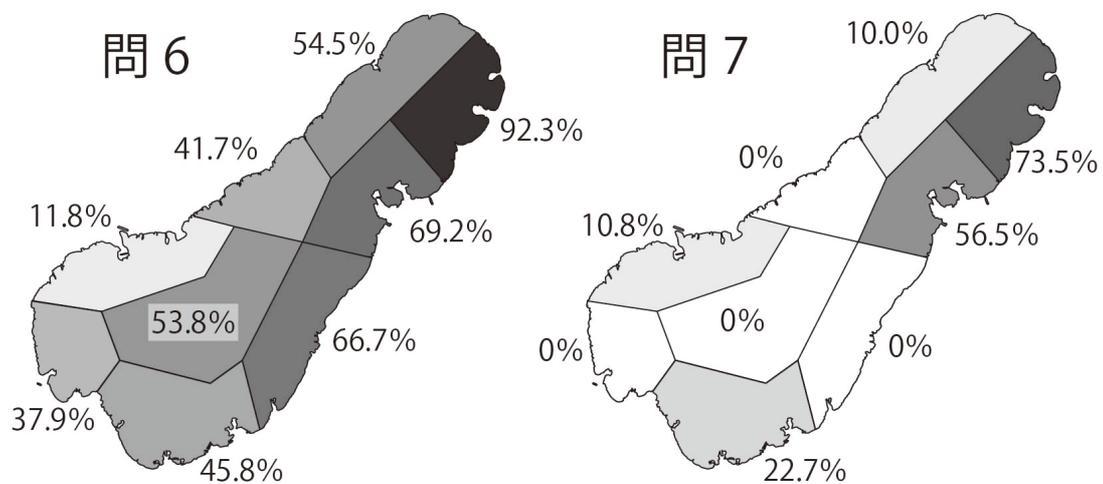


図 3：出身地ごとのシチャミを受けた経験がある回答者の割合（問 6 で A, C を選択）と、現住所ごとのシチャミを受けた（受けようとした）経験がある児童の割合（問 7 で A, B, C, D, E を選択）の比較。

シチャミを受けたことが無い回答者（「いいえ」を選択）の割合は、志戸桶、早町、阿伝・嘉鈍の 3 地区では 1 割程度、それ以外の地区は 3～4 割程度である。湾地区出身の回答者は、シチャミを受けたかすら分からない事例（「わからない」を選択）が約 49%（67 名）も存在し、シチャミに対する意識の低さが特に顕著である。このような傾向が、今日の児童に対するシチャミの実践にどのような影響を与えているのか、次は回答者の子供や孫に関する設問の結果をみていく。

**問 7** 今年の 9 月 2 日に、お子様はシチャミを受けましたか？

- A. 受けた（問 9 へ）
- B. 受ける予定で準備していたが、諸事情により受けられなかった（問 9 へ）
- C. 毎年受けているが、今年だけはシチャミを受ける年齢ではなかった（問 9 へ）
- D. 以前は受けていたが、シチャミの年齢を過ぎたため今年は受けなかった（問 9 へ）
- E. 以前は受けていたが、お子様の年齢以外の理由で受けなくなった（問 8 へ）
- F. これまで一度も受けたことがない（問 15 へ）
- G. シチャミを知らないため、何のことを質問しているのか分からない（問 15 へ）

表 2：児童の現住所ごとの問 7 の回答

	A	B	C	D	E	F	G	受けてない	無回答	合計
小野津地区	0	1	0	1	1	14	13	0	0	30
志戸桶地区	9	7	0	5	4	2	3	2	2	34
早町地区	3	0	0	3	7	2	8	0	0	23
阿伝・嘉鈍地区	0	0	0	0	0	7	0	0	0	7
湾地区	4	7	2	12	5	123	116	2	8	279
山手地区	0	0	0	0	0	1	6	0	1	8
荒木地区	0	0	0	0	0	7	11	0	0	18
嘉手浦地区	0	0	0	0	5	9	7	0	1	22
坂嶺地区	0	0	0	0	0	9	8	0	1	18
集落無回答	0	0	0	0	1	3	4	0	0	8
合計	16	15	2	21	23	177	176	4	13	447

問 1 で得られた現住集落をもとに集計する (表 2)。選択肢 A,B,C は、2016 年に児童がシチャミを受けた、または受けようとしたことを示す。D,E は、児童が過去にシチャミを受けた経験があるが現在は受けていないことを示す。F と G は、児童がシチャミを受けた経験を一切有しないことを示す。いずれも選択せずに「受けてない」と記入してある回答も 4 例あった。

選択肢 A,B,C を選択した回答者は、志戸桶地区、早町地区、湾校地区に現在住んでいる回答者に多い。選択肢 D と E もこの 3 地区に多く、小野津地区と嘉手浦地区でも少数の事例が確認できた。それ以外の地区では児童がシチャミを受けたという情報が得られなかった。(図 3)。志戸桶地区と早町地区では現在もシチャミが盛んであると見なせるが、志戸桶地区では選択肢 F と G の割合が約 17% (5 名)、早町地区では約 43% (10 名) に達する。問 6 で得られた割合と比較して、1 世代でシチャミを受けない児童の割合が高くなっている。また、出身者がシチャミをよく覚えている阿伝・嘉鈍地区で現在シチャミが全く行なわれていないことと、逆にシチャミに対する関心が薄いはずの湾地区でシチャミが行なわれている点は、問 5・問 6 の結果と矛盾する。

#### 問 8 シチャミをしなくなった理由は何ですか? (※年齢制限以外の理由)

- A. 忙しくなった、または面倒になったため (12 名)
- B. シチャミをする人がいなくなったため→誰ですか? ( ) ※問 10 参照 (5 名)
- C. その他 ( ) (4 名) 無回答 (2 名)

問 7 で E を選択した回答者 (n=23) が対象。選択 B のうち 4 名はシチャミをしていた祖母や曾祖母を理由としてあげた。選択肢 C のうち 1 例は、早町地区に住んでいる時は子供にシチャミをしたが、その後引っ越した集落ではシチャミをしなかったというものであった。

**問 9 お子様にシチャミを受けさせた理由は何ですか？**

- A. 子供の成長を祈るため (65名)
- B. 意味はよく分からないが、小さい頃にしていたからなんとなくしている (3名)
- C. 意味はよく分からないが、家族や親戚がやりたがっているため (2名)
- D. その他 ( ) (0名) 無回答 (10名)

子供がシチャミを受けた経験がある回答者、つまり問7で選択肢A,B,C,D,Eを選択した回答者の児童の回答 (n=77) と、問7でいずれも選択せずに「受けてない」と記入した回答のうち、問8以降に回答していることから過去には児童がシチャミを受けたと判断できる回答2例と、本人の兄姉(調査対象外の年齢)がシチャミを受けていたが、シチャミをしてくれる人物の死去により本人はシチャミを受けていない児童1名の回答の合計80名分を対象にしている。選択肢Aが全体の81.3%を占め、シチャミが成長儀礼として認識されていることを示す。

**問 10 誰がお子様にシチャミをしましたか？(※お子様から見た関係)**

- A. 母親 (7名) B. 父親 (1名) C. 母方祖母 (31名) D. 母方祖父 (1名)
- E. 父方祖母 (27名) F. 父方祖父 (1名) G. その他(曾祖母3名 曾祖父1名 記載なし1名) 無回答 (9名)

問9と同じ児童の回答 (n=80) を対象にする。うち2名の回答者は、シチャミをしてくれた人物をそれぞれ2名挙げているため、延べ82名のシチャミをしてくれた人物を確認することができた。ひとりが複数の児童にシチャミをすることが可能なので、これはあくまで延べ人数である。父・祖父・曾祖父の男親は4例のみで、無回答を除くと93.2%が女性によるシチャミであった。

**問 11 お子様にシチャミを施した人が現在お住まいの集落と、出身集落をご記入下さい**

(現在の集落 ) (出身集落 )

問10で得られたシチャミを子供に対して行なう人物の出身地と現住所を明らかにし、シチャミ実践の地域差をもとめる。問10の延べ82名を対象とする(表3)。

表の縦軸が、シチャミをしてくれる(してくれた)人物が現在住んでいる地区で、横軸が、その人物の出身地区を示す。志戸桶地区出身で志戸桶地区に現在も住んでいる人物が34名(約41%)と圧倒的に多く、早町地区出身で早町地区現住の回答者(4名)(約5%)を大きく引き離す。志戸桶地区・早町地区出身者(46名)、またはこれらの集落に住んでいる他集落・島外出身者(8名)がシチャミを行なう事例が多いことが明らかである。

表3：児童にシチャミを施した人物の現住所と出身地区

		出身地区											
		小野津	志戸桶	早町	阿伝 嘉鈍	湾	山手	荒木	嘉手浦	坂嶺	無回答	島外	合計
現 住 所	小野津地区	3	1										4
	志戸桶地区		34							1	4		39
	早町地区		2	4		3						1	10
	阿伝・嘉鈍地区												0
	湾地区			1	2		1	2					6
	山手地区						1						1
	荒木地区		2										2
	嘉手浦地区									1			1
	坂嶺地区			2		2							4
	無回答・死去									2	13		15
	合計	3	39	7	2	5	2	2	0	2	15	5	82

問7では、シチャミを受けた湾地区在住の児童が33名存在することが明らかとなっていたため、上記の82名中、湾地区在住の児童にシチャミを行なう人物（n=33）の出身集落を調べた（表4）。結果、大多数（31名）は湾地区以外の集落出身者であることが判明した。

表4：湾地区在住の児童にシチャミを施した人物の現住所と出身地

		出身地区											
		小野津	志戸桶	早町	阿伝 嘉鈍	湾	山手	荒木	嘉手浦	坂嶺	無回答	島外	合計
現 住 所	小野津地区												0
	志戸桶地区		11							1	2		14
	早町地区			1									1
	阿伝・嘉鈍地区												0
	湾地区			1	2		1	2					6
	山手地区						1						1
	荒木地区		2										2
	嘉手浦地区												0
	坂嶺地区			2		2							4
	無回答・死去									2	3		5
	合計	0	13	4	2	2	2	2	0	2	4	2	33

問14 お子様が何歳の時にシチャミをしますか（しましたか）？ ※かぞえ年（複数回答）

選択肢は1から12歳まで。66名が回答。1歳から6歳まで毎年受けた例は9例、7歳まで毎年受けた例は3例、10歳までほぼ毎年受けた例は4例あった。一定年齢までほぼ毎年受けるのは過去の報告例と一致する。その一方で、1歳の時だけ実施した事例が9例（保育園1歳児の3例を含む）あったほか、2歳から6歳の間に一度だけ受

けている例（11例）、満年齢で答えているらしい事例（1例）、小学校入学・幼稚園卒園を区切りとして認識している事例（3例）、3,5,7歳に受けた事例（1例）もあった。

**問 15** あなたがお子様にシチャミを受けさせたことがない理由を選んで下さい（複数回答）

- A. 島外出身でシチャミを知らないため（102名）
- B. 喜界島で生まれ育ったが、シチャミを知らないため（132名）
- C. シチャミは知っているが、めんどろだから。伝統行事に興味が無いため（1名）
- D. シチャミは知っているが、信仰している宗教の事情ではない（1名）
- E. シチャミは知っているが、シチャミを行なう場所や水源が無いため（3名）
- F. シチャミは知っているが、シチャミのやり方を知る人がまわりにいないため（18名）
- G. シチャミは知っているが、周囲がシチャミをしていないため（65名）
- H. その他（ ）（31名） 無回答（13名）

問9で用いた80名分の児童の回答（保護者79名分）を除いた、児童367名の保護者（361名）のうち、回答に不備がある10名分を除く回答を対象とした（n=351）。選択肢C～Hは、シチャミを知っているにも関わらずシチャミをしていない理由を知る上で重要である。選択肢Hを選択した31名のうち29名分には多種多様な理由の記載があった。主なものを意識して挙げると、「シチャミは自分たちの集落の儀礼ではない」「シチャミは早町校区の行事と認識している」「集落にはシチャミに代わる行事がある」「現在住んでいる集落で昔シチャミをしていたことを知らなかった」「旧暦で個人的に行なう行事は忘れがち」「やりたいが、やりそこねている」「日にちが分からない」「以前はやっていたが、嫁ぎ先や引っ越し先でシチャミをしないとされた」「シチャミをしてきていた祖母と離れて住むようになったため」「回答者の親が『孫にまではしない』と言っている」「いつの間にか集落でしなくなった」「島に帰って来たばかりで忘れていた」「忙しくて時間が無い」などがある。

## 6. 考察

### （1）シチャミの本質

アンケート調査により、シチャミ儀礼の現状が明らかとなった。シチャミの主な担い手は女性であり（問10）、成長儀礼としての意味が広く共有されていた（問9）。これは先述の古い報告例の内容と同じであるから、女性による子の成長祈願がシチャミの本質だと思われる。一方で、厳密でない要素もある。集落ごとに異なるが、シチャミは1歳から7歳まで毎年、もしくは1歳から10歳まで特定の年を飛ばしてほぼ毎年実施する事例が多く報告されている。しかし、問14の結果は、そのように連続して実

施する事例は少数派であることを示した。様々な理由でシチャミが中止になる事例もある（問 7 の選択肢 B）が、一部を除いて、現在のシチャミは必ず毎年受けるものでなく、年齢は厳密な儀礼の要素として認識されていないと言える。

## （2）シチャミの衰退

喜界島全体ではシチャミをしない家庭が多数派である（問 7）。しかし、積極的にシチャミをしないことを選択する事例は少なく、ただ単にシチャミを知らない、シチャミを知っていてもやり方を知らないなど、消極的な理由が圧倒的に多い（問 15）。特に、島外出身の保護者の大多数はシチャミを知らない（問 5）。シチャミをしている家庭でも、シチャミをする余裕が無くなった場合や、シチャミをしてくれる高齢者が身近になくなった場合にシチャミが途絶えてしまう事例が少なくない（問 8；問 15）。過去の報告例によると、祖母ではなく若い母親がシチャミを執り行っていた事例が少なくないのであるが、現在は母親によるシチャミはごく少数に留まる（問 10）。

問 5 からは、若い世代ほどシチャミを知らない回答者が多くなる傾向が明らかである。図 3 は、回答者（大多数が児童の親）が子供の頃にシチャミを受けた割合の地域差と、現在の児童がシチャミを受けた割合の地域差を比較するための図であるが、わずか 1 世代でシチャミを受けた児童の割合が激減していく様子が分かる。シチャミは世代交代や島外からの人口流入に上手く対応できずに廃れつつあると評価できる。

## （3）現在のシチャミ実践の地域差

今日のシチャミの認識と実践には顕著な地域差が見られた（図 2；図 3）。問 15 の自由記載では、シチャミを特定の集落だけで行なわれる儀礼と認識している回答者も散見されたが、シチャミがかつては喜界島の全集落で実施されていたことは既に述べた。今調査で明らかになったのは、シチャミが廃れた集落と、今日までシチャミの習慣が色濃く残った集落の地域差である。志戸桶や佐手久、早町など北東部の集落で今日もシチャミが実施されており、これらの集落に縁がある人物が他集落に住む児童にシチャミを施す様相も明らかとなった（問 11）。一方で西部の集落、特に湾地区では、シチャミの存在すら知らない回答者が圧倒的に多い（問 5）。

なぜこのような東高西低の分布差が今日生じているのだろうか。空港や港、役場が所在する湾地区は喜界島の政治経済の中心地であり、大型店舗や集合住宅もみられる都会的な空間である。島外出身の親も多いため（問 3）、湾地区を中心とした西部の集落は東部の集落と比べて外部の影響（e.g.七五三など日本本土の成長儀礼）を受けやすいと考えられる。筆者がシチャミについて聞き取り調査をしていると、「シチャミは都会の七五三みたいなもの」という表現を頻繁に聞いた。今回のアンケートでもその旨を書き込んだ回答者がいたので、喜界島では比較的新しい成長儀礼である七五三が、古くからの成長儀礼であるシチャミと同一視されているものと思われる。七五三は 1982

年頃の喜界島では定着していなかった（上野 1983）が、1990 年代頃までには行なわれ始め、現在も執り行われている（藤元彦典 私信 2017 年 12 月 15 日）。七五三の普及が、シチャミの実践に影響を与えている可能性は高い。

シチャミが行なわれる日も重要である。北部の諸集落（シバサシ区域 図 1）では、節折目から 5 日目（辛の日）にあたるシバサシの日に重要な祖先祭（墓祭り）を行なう。それ以外の南部の集落では、同様の祖先祭（高祖祭り）を旧暦 9 月に入って最初の壬戌の日に行なう。つまり北部の諸集落では、シチャミを行なう日と重要な祖先祭の日が時間的に近い。このため北部の集落の住民は、シチャミと祖先祭が時間的に連続しない南部の諸集落の住民と比べて、シチャミを意識しやすい可能性がある。ただし、シバサシ区域にもシチャミの実践が低調になっている集落が多いため、今日のシバサシをシチャミと単純に結びつけることはできない。シバサシと七五三の影響については慎重な裏付けが必要である。

子供の成長儀礼である以上、少子化の影響を考慮する必要がある。小学校の統廃合が示すように、喜界島では少子化が進んでいる。廃校になった旧滝川小学校を例に挙げると、同校は、本稿で山手地区に編入した城久、滝川、島中の 3 集落を校区としており、戦後から 1960 年代までは概ね 100 人以上の生徒が在籍していた。しかし、70 年代に生徒数が激減し、80 年代以降は 20 人前後で推移する（喜界町立滝川小学校創立百周年記念事業実行委員会 2003）。2016 年の本アンケート調査時は、旧校区単位で集計できない程にまで 3 集落の児童は少なくなっていた。このような少子化が、子の成長儀礼であるシチャミを衰退させていることは想像に難くない。しかし、シチャミが今も盛んな地域でも、小学生の数は志戸桶地区で 33 人、早町地区で 18 人と、シチャミが盛んではない他の集落、例えば小野津集落（22 人）と比べて極端に多いわけではない（喜界町 学校紹介）。人口が多い湾地区でシチャミが低調なことからも、児童数だけで現在のシチャミの地域差が説明できないことは明白である。

## おわりに

本アンケート調査により、2016 年現在の喜界島におけるシチャミ儀礼の実践には、東高西低の顕著な地域差が存在することが明らかとなった。七五三やシバサシなど他の行事の存在、そして少子化が主な原因として考えられるが、単一の要因ではなく、複数の要因が複雑に絡み合っている現在のシチャミ実践の衰退と地域差を生み出していると考えられる。一方で、廃れつつある中で実践されているシチャミに広く共通する点は「女性が執り行う」「子の成長祈願」であり、これら広く共有されている不変の要素はシチャミの本質であるとみなせる。

## 謝辞

本アンケート調査は、筆者が喜界町埋蔵文化財センターに勤務していた折に、喜界

町教育委員会並びに喜界町保健福祉課のご協力を得て実施致しました。特に喜界町立喜界小学校（河野英明校長）、喜界町立早町小学校（堀口俊雄校長（当時））、喜界町立あゆみ幼稚園（美沢久子園長）、喜界町立のぞみ幼稚園（値春美園長）、社会福祉法人秀心会 ひまわり第一保育園・ひまわり第二保育園（久保一也園長）の職員の皆様は、ご多忙にも関わらずアンケートの配布と回収を引き受けて下さいました。アンケートの内容につきましては、喜界町教育委員会生涯学習課の岩松利和氏と、澄田直敏氏、松原信之氏ら喜界町埋蔵文化財センターの皆様、並びに喜界島郷土研究会の皆様からご意見を頂き完成させることができました。倉橋家の皆様は、早朝にも関わらずシチャミを見学する貴重な機会を与えて下さいました。藤元彦典氏と上田写真店の皆様からは、喜界島の七五三についての所見を頂きました。最後に、回答を提出して下さいました全ての保護者と児童の皆様にご心より御礼申し上げます。

## 引用文献

- 伊波普猷 1961「鬼界雑記」『伊波普猷選集 上巻』沖縄タイムス社 398-405（初出：1929年）
- 岩倉一郎 1943『喜界島年中行事』日本常民文化研究所彙報 第60号 日本常民文化研究所
- 上野和男（編）1983『奄美喜界島の祭祀と社会構造 鹿児島県大島郡喜界町嘉鈍』明治大学政経学部社会学関係ゼミナール報告 第19集 別刷Ⅱ
- 小野重朗 1974「アラシツ・シバサシ小論」『沖縄文化研究1』164-184
- 喜界町『行政区別世帯数・人口一覧（平成29年4月1日現在）』（アクセス：2017年11月25日）[http://www.town.kikai.lg.jp/kikai01/forms/down\\_shurakujinkou.pdf](http://www.town.kikai.lg.jp/kikai01/forms/down_shurakujinkou.pdf)
- 喜界町『学校紹介 早町小学校 集落別児童数（平成28年4月6日現在）』（アクセス：2017年11月25日）<http://www.town.kikai.lg.jp/kikai06/sosho.asp>
- 喜界町保健福祉課 2011『おいしいたのしい喜界島 子どもに伝えよう！“島じゅうり”』
- 喜界町立滝川小学校創立百周年記念事業実行委員会 2003『創立百周年記念誌』
- 北見俊夫 1959「通過儀礼-喜界島を中心として-」『奄美 自然と文化 論文編』日本学術振興会 139-149
- 竹内譲 1933『趣味の喜界島史』（初版）南陽社
- 竹内譲 1969『喜界島の民俗』黒潮文化会
- 中澤鶴子 2008『語り継がれている民話「マルブンダチャー」』平成20年度奄美沖縄民間文芸学会喜界島大会発表資料
- 西俣謙龍 1905『喜界島誌』鹿児島県立図書館所蔵
- 三井喜禎 出版年不明（1932年以降）『曙の小野津』喜界町立図書館所蔵の複写
- 三井喜禎 1965『喜界島古今物語』
- 山田慎也 2017「共同研究「民俗儀礼の変容に関する試料論的研究」の経過と概要」『国立歴史民俗博物館研究報告』205: 1-6